

## Track 2.. 監禁は愛の証!?

「……手首、痛くない？」

「さつきから、すごく困った顔してる。

そうよね、手錠なんてされるの初めてなものね」

「あなたは、自分はいいい子なのに、

こんなことされるのは、おかしいって思ってる？」

「普通、いい子は手錠をかけられたりしないし、

お外へ行ったらダメなんて言われない……」

「でも、あなたはこれから、

私にお仕置きをされてしまうの」

「手錠は外してもらえないし、

自由にお部屋の外にも出られない」

「ここで、ずっと……ずっと、

お部屋に閉じ込められたまま、生きていくのよ？」

「だってあなたは、わるい子だもの。いい子なんかじゃない」

「あなたはわるい子……わかる？」

「カノジョがいるのに、知らない女の子に強いお酒を飲まされて、お部屋へ連れていかれそうになったのだものね？」

「たまたま、通りかかったなぎささんたちが止めてくれなかったら、今頃どうなっていたのかしら……?」

「いいのよ、謝ってくれなくても。」

わるい子には、たくさんお仕置きをする……

それだけの話だもの……」

「今から、あなたに教えてあげる。」

女って生き物が、どれだけ狡猾で、残忍か……」

「お部屋の外は、危険でいっぱいなの。だから、私といっしょに、ここで暮らすのが一番安全……」

「仕事なんて辞めてしまえばいいわ。」

私があなたを養うし、養わせてほしい」

「身の回りの世話も、すべて私がする。」

あなたは、どんどんダメになっていいの……」

「人としても……」

「男性としても……」

「私のお仕置きを受けてくれる?」

「……怖がらずに、こっちを向いて？  
楽にしているから……」

「ん……ちゅ……ん、んんっ……んっ、ん……はあ……  
飲んで？」

「もう一回……ちゅ……んん、ん……ちゅっ、はあ……  
口をもっと開けて……これも飲むの……んん、ちゅっ、  
んん、んっ……はあっ……」

「お酒、平気？ 少し、強すぎたかしら……」

「気分が悪くなったら言って？ 酔いが回るまで、  
こうやって抱きしめているから……」

「でも覚えておいてほしい」

「知らない女の子に、酔ったまま、お持ち帰りされたら、  
何をされてしまうのか……」

「……ずいぶん、酔いが回るの早いわね。  
身体がこんなに熱くなってる……」

「もう、力が入らなくなってきたの？  
そんなに目をとろんとさせて……」

「あなた、ずるいわ。普段からかわいいのに、酔ったらもつとかわいくなってる……」

「だから、お持ち帰りされちゃうのよ？」

あなたは真面目でしっかりしてるから、  
こういう時ぐらいしか隙がないもの……」

「でも、女の子たちの気持ちもわかるわ。

いつも隙がないからこそ、

あなたを乱れさせたくなるの……」

「乱れたら、どんな風になるのかを、見たくなる……」

「……そろそろかしら？」

お仕置きをするって言ったの、覚えているわよね？」

「これから私を、あの晩の子だと思って？」

「あなたにお酒を飲ませて、

自分の部屋に連れて帰ろうとした女の子……」

「もちろん、私以外の女の子に触られても、  
興奮したりしないでしょう？」

「おちんちん……大きくなったりしないわよね？」

「……言ってるそばからどうしたの？」

下着の上から撫でてるだけなのに、  
もう硬くなってるんじゃない？」

「腰を逃したらダメ……おちんちん、我慢して？」

「我慢……我慢よ？ 他の女の子の手で気持ちよくなったら、  
浮気したことになっちゃうもの……」

「おちんちん、小さくできる？」

ねえ、ほら……下着に、大きくなった

おちんちんの形が浮かびあがってる……」

「これ、いつもより大きくなってるわよね？ どうして？」

「このままだとあなたのおちんちん、

浮気ちんぽって、言われちゃうわよ？」

「口では否定しても、おちんちんはそう言っていない」

「あなたは、他の女の子と浮気して興奮してるのよ」

「その証拠に、ほら……」

下着にこんな大きなシミを作っちゃってる……

早く、直に触って欲しくて堪らないんでしょう？」

「手錠で手も動かせないし、これだけ密着されたら、身を振って逃げることもできない……」

「あなたにできるのは、おちんちんが気持ちよくならないように我慢するだけ……」

「見てて？ ゆっくり、あなたの下着の中に、女の子の手が入っていくのを……」

「お腹から、撫でさするようにして…… ゆっくり…… ゆうゆうゆっくり……」

「……どう？ 何か弁解はある？」

もう、おちんちんの先が、こんなにヌルヌルしてるけれど……」

「正直、がっかりしたわ。」

姉さんが、男は浮気をする生き物だって言っていたのは本当だったのね……」

「あなたも、他の男性と変わらない」

「見知らぬ女の子が相手でも、おちんちんを触られたら、こんな風に、興奮してしまうのでしょうか？」

「しかもあなたは……下着を脱がして触られるより、こうやって中に手を入れられて、触られる方が好きなの……」

「下着の中で、女の子の手がもぞもぞ動いてるのを見て、  
たくさん、エッチな想像をしちゃうのよね？」

「ああ、ほら……この音……」

おちんちんがくちゅくちゅいつてるの聴こえる？」

「聴こえないなら、もっと大きな音で聴かせてあげる……」

「ふふっ……」

そんな切なそうに掠れた声を出して……

おちんちん、気持ちよくなってるのね……」

「浮気者……う、わ、き、も、の……」

仕方ないわよね。あなたのおちんちんは、  
だらしない浮気ちゃんぽだもの……」

「違うって何が？ 何も違うないでしょう？」

他の女の子に触られても、

おちんちん、気持ちよくなっちゃうんだもの……」

「どうする？」

このまま、無抵抗でおちんちんから出しちゃう？」

「手錠されているのに、そんなに腕を動かしたら危ないわ。  
手首に傷ができたかどうかするの？」

「立ちあがろうとしても無駄。

いくら抵抗しても、おちんちんの先をこうしたら……」

「ほら、ね？

よちよち歩きの赤ちゃんみたいに、すぐ座り込んだじゃう」

「それとも、赤ちゃんみたい……じゃなくて、

あなたは赤ちゃんなのかしら？」

「赤ちゃんのおちんちんだから、

我慢できないの？ 子供のおちんちんだから？」

「出ちゃう出ちゃうって言っても、

あなたをお持ち帰りした女の子は手を止めてくれないわ」

「それどころか、心の中でこう思うの」

「あなたのおちんちんがすぐ出ちゃうのは、

自分が魅力的だからだって……」

「雑誌やテレビで紹介されてるあの女より、

私が上なんだって……」

「ほら、そこにある雑誌を見て？

あの写真の子が、あなたのカノジョでしょう？」



「でもこの手は？」

誰の手で、おちんちん気持ちよくなってるの？」

「ふふっ、頭がおかしくなりそうよね？」

「心と体がバラバラになって、自分でもどうしたらいいか、わからなくなってくるでしょう？」

「……おかしくなってしまうえばいいのよ」

「このまま、下着の中でお漏らしして、

頭の中もパンツの中も、ぐちゃぐちゃにしちゃえばいい」

「ん、ちゅっ……んん……はぁ……喉の奥に流し込んで……  
そう……喉を鳴らしながら、味わうように……」

「おちんちんを、こうされるのが好き？」

「手のひらで、先っぽをひねるように……  
ほら、こう……こうやって……」

おちんちん、乱暴にされるのがいいの……？」

「きちんと、雑誌のカノジヨを見て？」

あなたの恋人は誰？ 声に出して言ってみて？」

「……じゃあ、おちんちんを触ってるのは誰の手？  
あなたを気持ちよくさせてるのは誰？」

「念のために忠告しておくわ」

「あなたは、もっと自分の気持ちに、正直になったほうがいい。そうじゃないと、この後、どんどん惨めになる」

「今の自分を認めたくない気持ちはわかるわ。でも……」

「おちんちん、気持ちいいんでしょう？」

初めての浮気で興奮しちゃってるのよね？」

「さっきから違う違うって言っても、

おちんちんは、そう言っていない」

「このまま、出しているのよ？」

あなたのは、我慢できないおちんちんだもの」

「お持ち帰りの女の子にも知られちゃうわね。

あなたのおちんちんは、すぐ出ちゃうおちんちんだって……」

「でも、その子はがっかりするどころか、

きつとこう考えるの……」

「テレビに出てるあの女より、私のほうがいいんだって……  
もっともっと、あなたを夢中にさせたいって……」

「すぐ出ちゃうあなたのおちんちんが、かわいいって……」

「なんでもソツなくこなすあなただからこそ、  
がんばっても我慢できないおちんちんが、愛おしくなるの……」

「この人のこんな姿を見られるのは  
自分だけだって、優越感に浸れるの……」

「あなたは今、どんな気持ち？」

「恋人がいるのに、  
他の女の子におちんちん、クチュクチュされて、  
何度も何度も、身体をぎゅーってされて……」

「あなたは、恋人でもない子に、  
征服されちゃうの。身も心も……  
ほら、もう抵抗できないでしょう？」

「諦めがついたら、おちんちんからいっぱい出して？」

「このままパンツの中で、  
あなたの浮気ちゃんぽがびゅーびゅーするのを、  
手のひらで感じたい……」

「……あなた、浮気って言葉に、すごく反応するのね」

「でも、それ……逆効果なのよ？」

「浮気させたい女にとって、罪の意識に苛まれる男の姿は、  
興奮の材料ではないの」

「あなたのそういう表情が、女は好物なの」

「抵抗すればするほど、おちんちんを乱暴にされて、我慢すればするほど、先っぽをクチュクチュされて……」

「無力よね？　どんなに恋人のことを想っていても、おちんちんを触られたら、オスの顔になってしまうのだから……」

「見せて？　あなたがオスになってる顔……カノジヨのために我慢してきたのに、みんな、他の女の子に搾り取られちゃうの」

「早く出して？　ねえ、出して？　浮気ちゃんぽはどうしたい？　今、パンツの中で何されてる？」

「くす、そんなに足をピンと伸ばして……指まで反り返らせて……ああ、出るのね……おちんちんから、びゅーびゅーするのでしょうか？」

「いいのよ、もっと私の手のひらに、おちんちん押し付けて？」

「もっと……もっと、おちんちんを突き出すの……もっと……もっともっと……」

「ああ、すごい……たくさん出てる……私の手のひらに……いっぱい……」

「聴こえる？ あなたのおちんちんから、びゅーびゅー出てる音……」

「気持ちよくてどうにもならないわよね」

「浮気するのって気持ちいい？ クセになりそう？」

「本当に、カノジヨのために性欲を我慢していたのね……」

「一途でいいらしい……」

「やっ、まだ出るの？」

「全然、止まらないわ……おちんちんがこんなに跳ねて……」

「体も、ずっとビクビクしっぱなしで……」

「パンツの中、あなたのでぐちよぐちよになっているわ……」

「これで、本当に浮気ちゃんぽになってしまったわね」

「あなたは浮気しちゃったの……カノジヨ以外の女の子の手で、気持ちよくなっちゃったの……」

「もう、言葉も出なくなったのね……」

「首を横に振るだけじゃ、何を言いたいのか、わからないわ」

「それに……まだ出るでしょう？  
これで終わりじゃないわよね？」

「ほら……ほらほらほら……」

おちんちんが気持ちいいの止まらない……」

「カノジヨと赤ちゃん作るために溜めていた  
精子、みんな搾り取られちゃう……」

「出したあとのおちんちんを、乱暴にされるの好き？」

「くす、そんな獣みたいな声を出して……」

「あなたは、もう浮気に夢中なのね。  
この気持ちよさからは逃げられない」

「腰を上げて？ パンツを脱がせてあげる……」

「今度は、おちんちんから元気よく出すところ、  
見せてほしい……」

「あそこに置いてある雑誌まで、  
何センチぐらいある？ 70センチぐらい？  
あそこまで、びゅーびゅーできる？」

「そんな風に身を振っても、  
逃げられないってわかるでしょう？」

「ほら、このまま……この角度で……」

おちんちんから出して？

あなたがどうやって赤ちゃんを作るのか見せて？」

「上手くできる？ 上手に赤ちゃん作れる？」

「まだ、こんなにおちんちんの袋が、  
パンパン……いっぱい出るように、  
ぎゅっぎゅっしてあげる……」

「きちんと、覚えておいて？」

「もし、あなたが女の子の部屋にお持ち帰りされていたら、  
こんな風にされちゃうの……」

「どんなにカノジヨのことを想っていても、無駄。  
無意味。無価値」

「自分の意思とは関係なく、一方的に、  
おちんちんを気持ちよくさせられて……」

「何度も何度も、おちんちんから精子を搾り出されて……」

「ふふっ、上手上手。」

あんなに遠くまでおちんちんから飛ばせるなんて、  
あなたって本当にすごい……」

「女は、たくさん出してくれる、  
元気なおちんちんが好きなの……」

「勢いよく出してくれるおちんちんが、愛おしいの……」

「それに……我慢できなくて、お漏らしするみたいに、  
おちんちんから出してるあなたって……」

「すごく、かわいい」

「いっぱい出せて偉いわ」

「……でも、本気で浮気にハマったりしないだね」

「私も、あなたをお部屋に閉じ込めたくはない」

「手錠は、その……たまにしたく……  
なってしまうかもしれないけれど……」

「抵抗したくてもできないあなたが、  
かわいすぎて……私のほうがハマってしまいそうなの……」

「ふふっ。少し休んだら、お風呂に入りましょう」

「おちんちん、がんばったわね。お疲れさま」